



ブロイラーの謎：『魂の自然史』と二人の巨人のすれ違い

1921年・要素心理学の青写真と精神医学史の再構築

松石 竹志 Takeshi Matsuishi, M.D., Ph.D.

巨人の証言：同じ書物に届いているか？

アンリ・エー, 1940

- 「本質的に原子論的・連想主義的である」
- 「しかし精神を脳の組織化そのものに浸透させる、明確に動力学的（ダイナミック）な一元論だ」
- ターゲット：『魂の自然史』（1921）

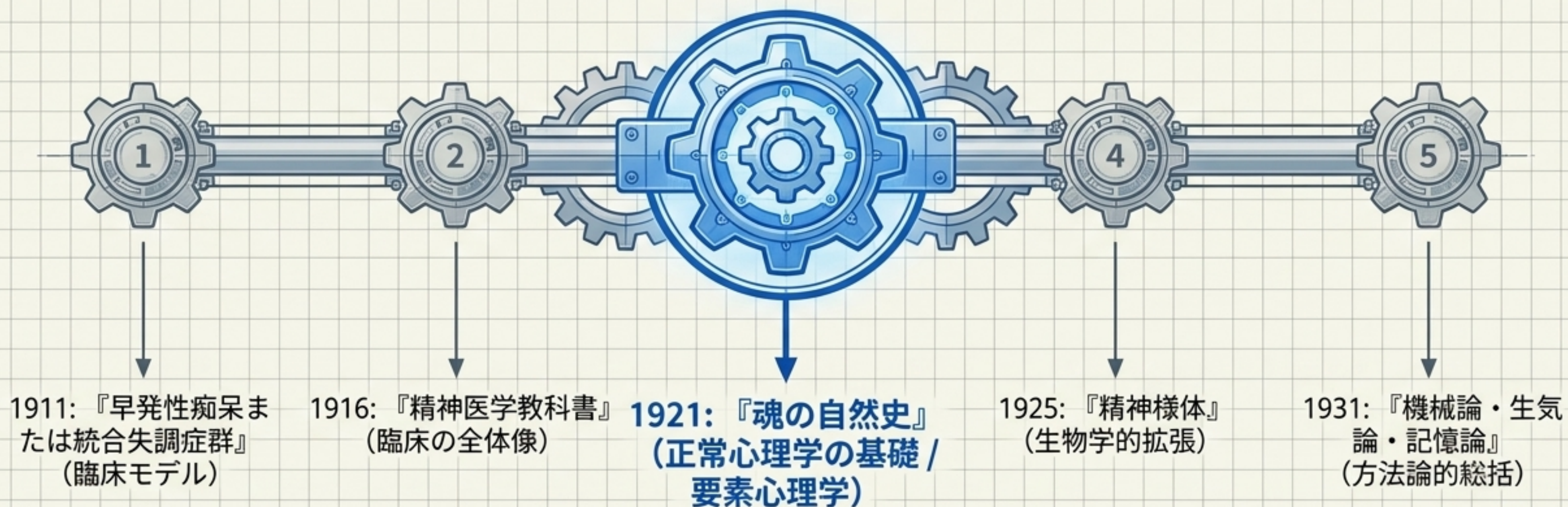


カール・ヤスパーズ, 1913/1973

- 「理念の図式であって、探究可能な対象ではない」
- 「記憶的機能、統合、構造の合目的性を束ねようとした」
- ターゲット：『精神様体』（1925）に対する批判

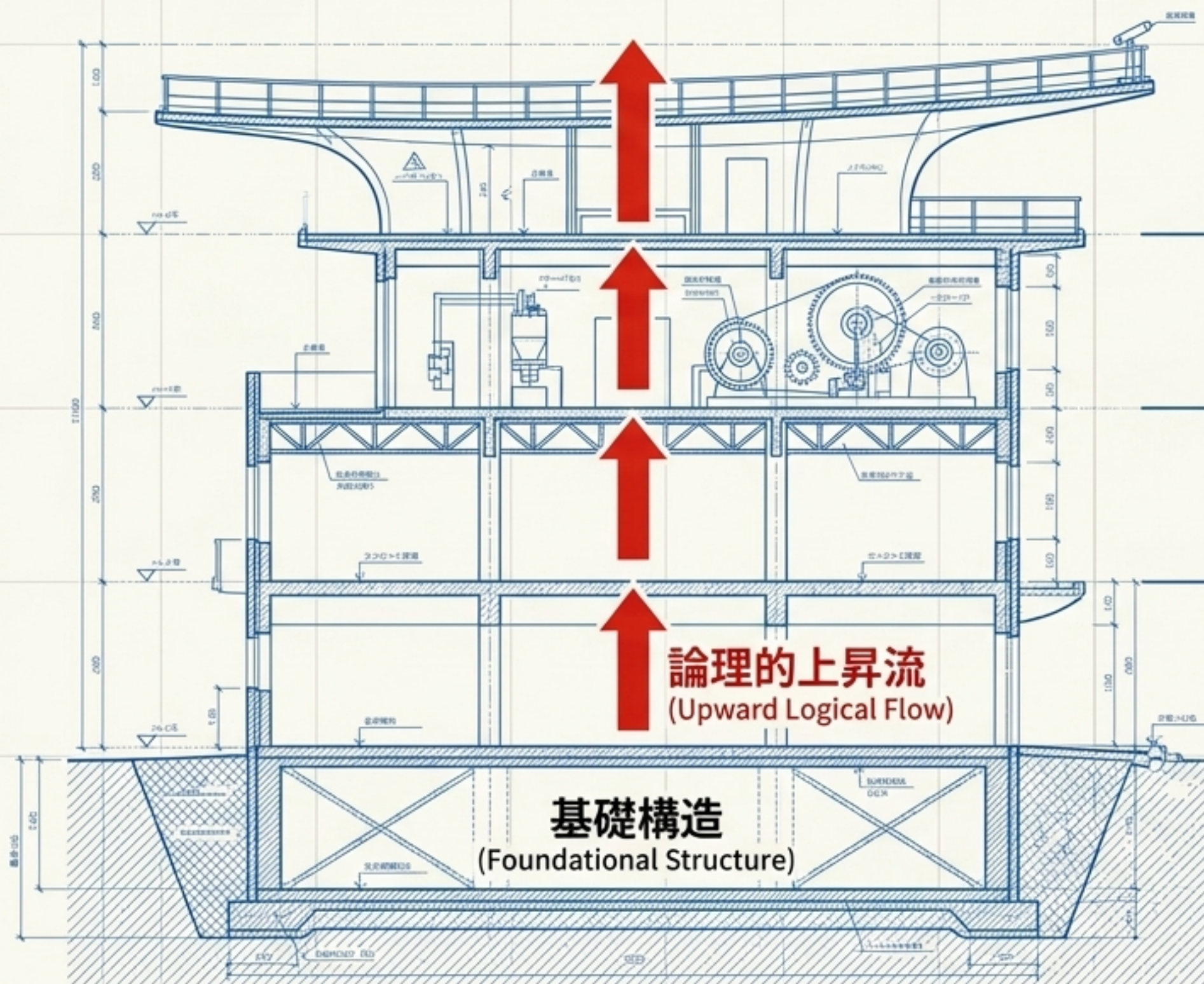
矛盾する評価。彼らは同一の思想段階を見ていたのか？

体系の蝶番：オイゲン・ブロイラーの5著作



1921年は、臨床的観察を「要素心理学」へと翻訳し直した、体系の隠れた中心（蝶番）である。

『魂の自然史』 (1921) の設計図



第4部 (展望): 人生観・世界観
(目的論の禁止と決定論)

第3部 (中核装置): 心的装置の解剖
(記憶、連合、知覚、力、切替機構)

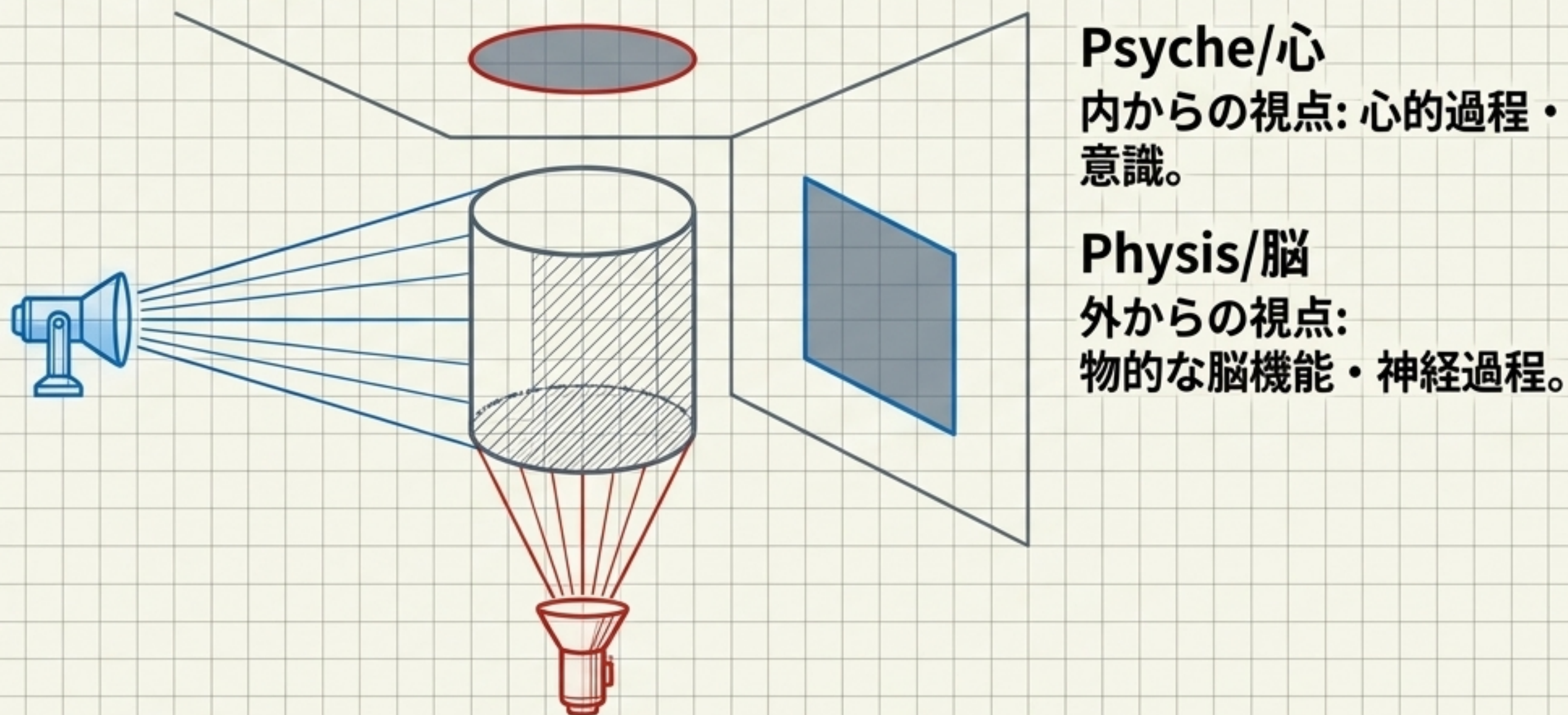
第2部 (導出):
中枢神経機能からの意識の導出 (意識の条件)

第1部 (基礎):
心を知る手段 (思考と感覚、心身平行論の否認)

本解題では第2部・第3部の「機構」を解剖し、第4部をヤスパース批判に対す「証拠」として照合する。

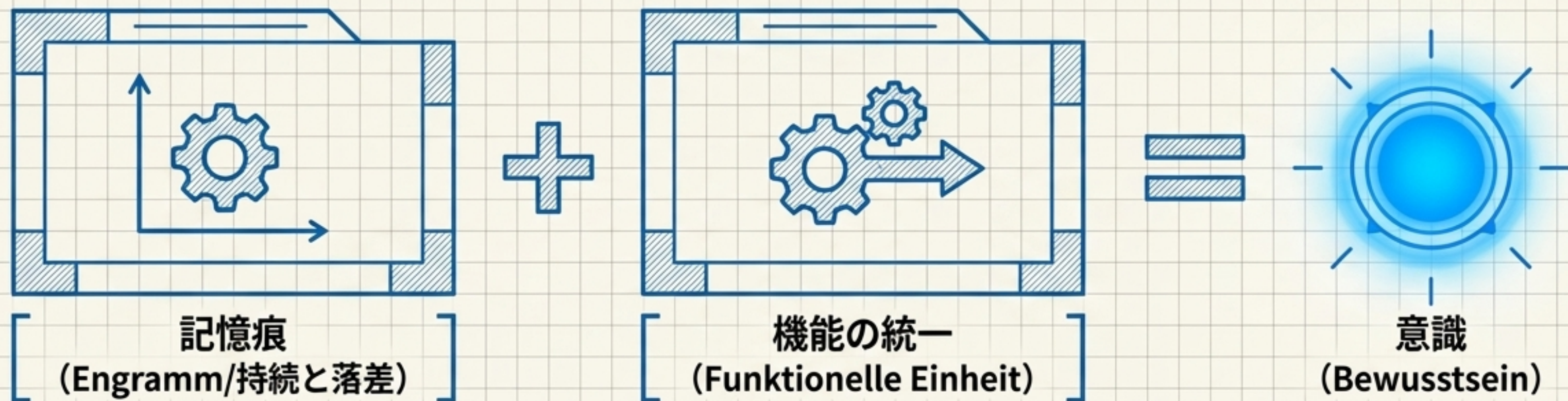
心身同一説 (Identitätshypothese) : 立場の差異

「我々が知っている差異とは、立場の差異であって事象の差異ではない」(S.30)



精神は脳の外にある別の実体ではない。二つの系列が平行しているのではなく、
「一つの事物」を異なる側から見ているに過ぎない。

Functio Cogitans (意識の発生機構)

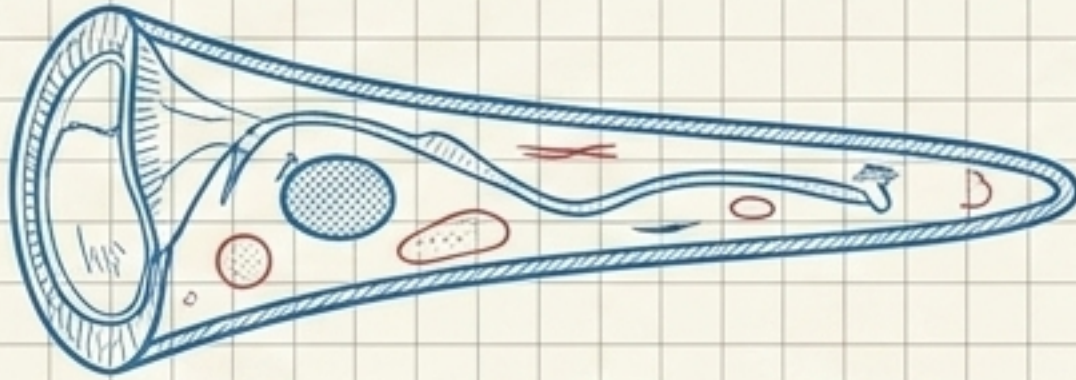


- ・ 記憶を持たない「突かれて飛ぶ石」には、比較の基準がないため「変化」も「知覚」も存在し得ない。
- ・ 先行する瞬間（記憶痕）と現勢の機能が「統一」へ融合した時、初めて「知覚の落差」が生じる。

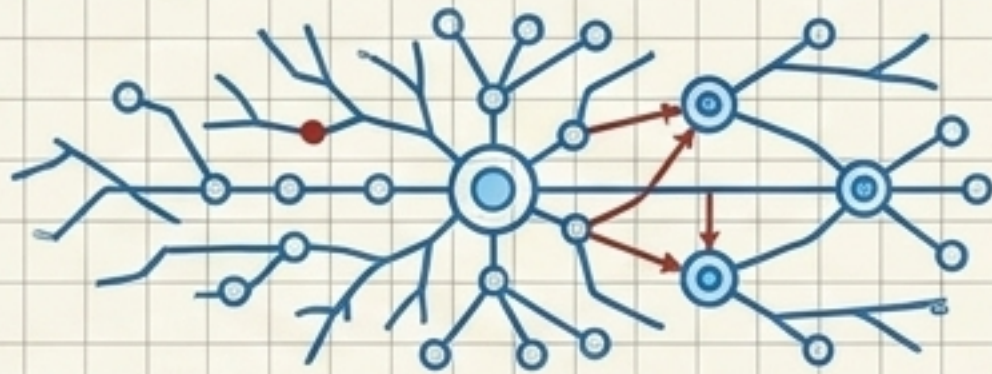
「思惟する実体 (Res cogitans) は存在せず、思惟する機能 (Functio cogitans) が存在する」 (S.41)

Mneme：記憶の生物学

「すべての細胞は記憶痕担体（engrammatophoro）から生じる」（S.87, 註）



1. 神経をもたない生物: ラッパムシ等の学習。
記憶は神経系に限定されない。
生ける原形質の一般的機能である。



2. 個体記憶と系統発生：反射の可塑性も心の可塑性も、本質的に同一の機能である。



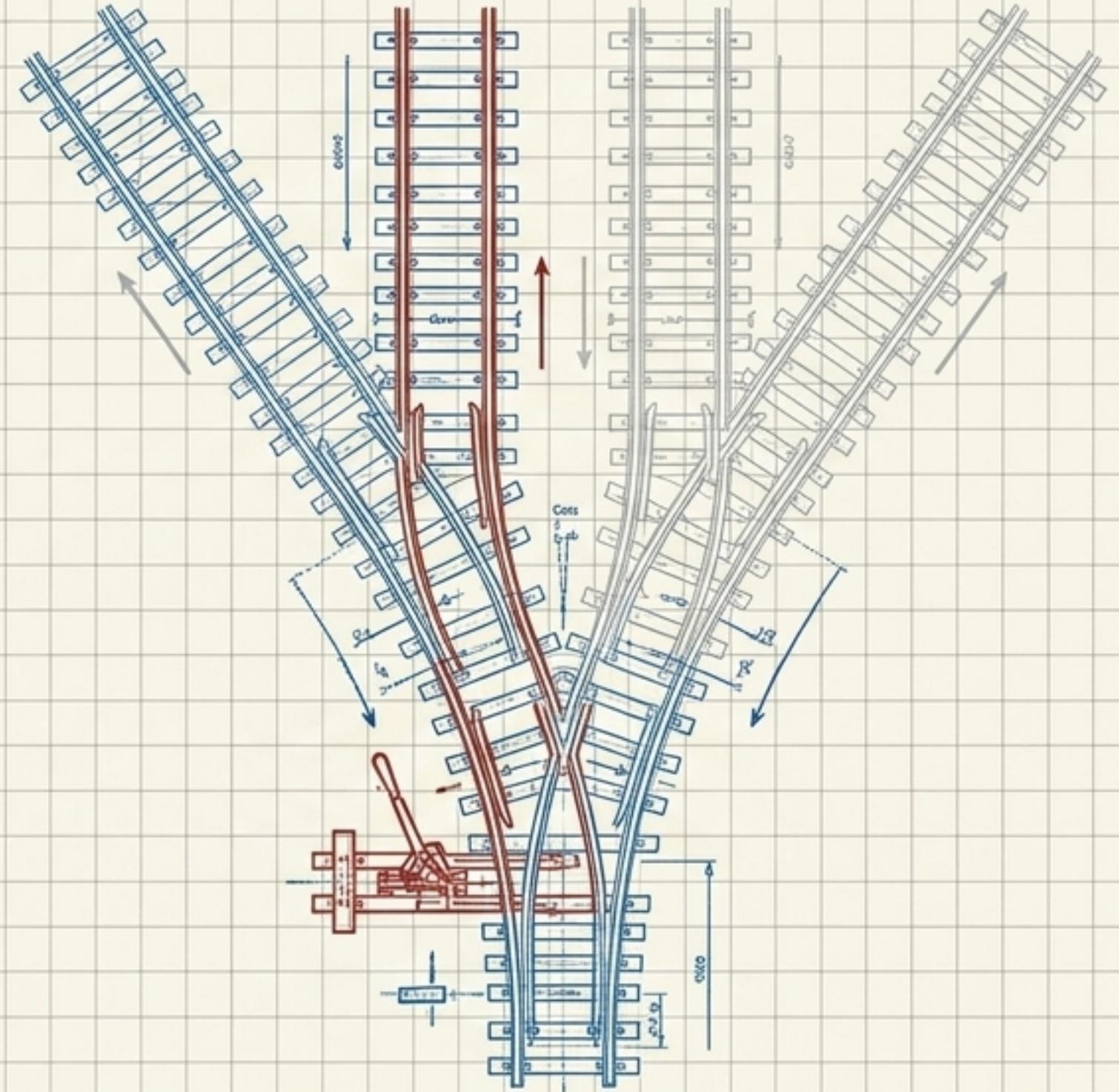
3. 遺伝子＝記憶痕：親世代の機能の「喚起（Ekphorie）」が遺伝に他ならない。

生命とは、記憶（ムネーメ）的な諸性質の発現そのものである。

原子論の否定：「切替機構（Schaltung）」

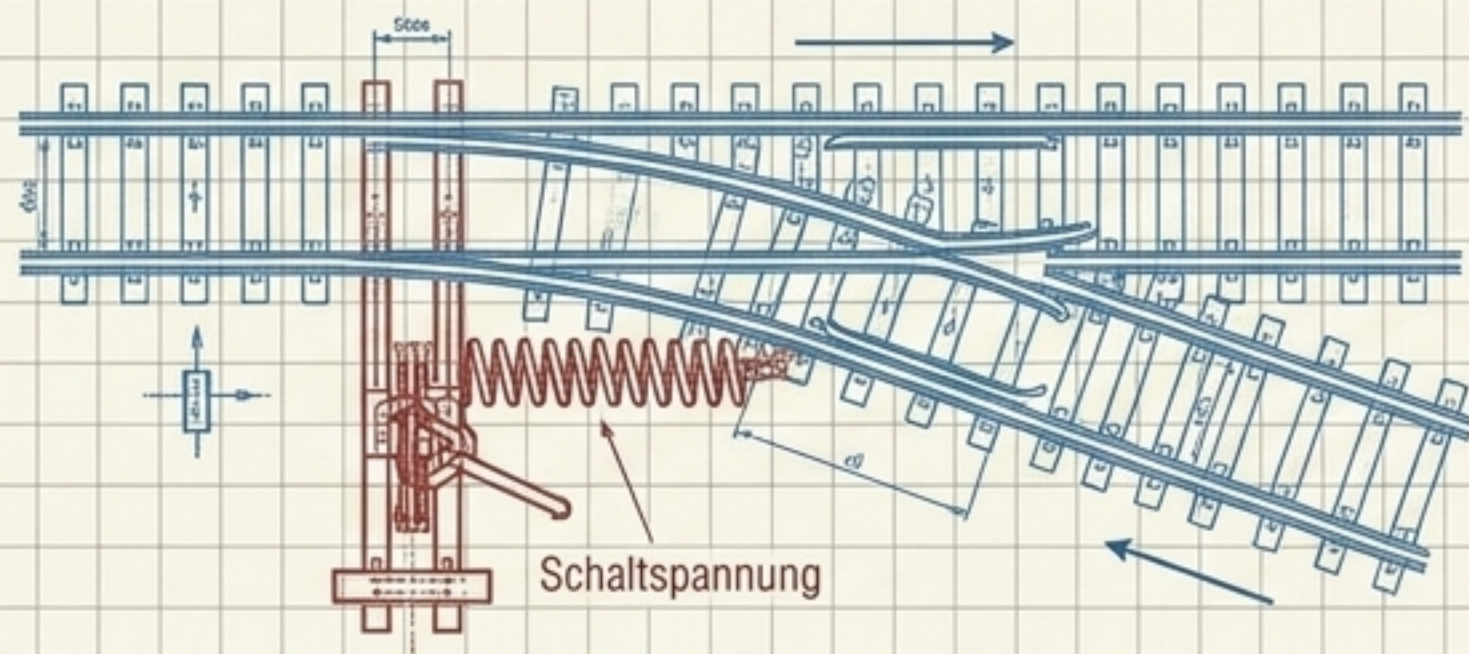
- 線路（連合）：薔薇の表象は棘、椿、少女など無数の観念に繋がりが得る。これだけでは「思考」は生じない。
- 分岐器（切替/Schaltung）：思考目標や努力（Strebung）が「開閉器」を操作し、特定の経路を疎通させ、それ以外を完全に遮断する。

エーが「連想主義的」と批判したのは「線路の在庫」の次元に過ぎない。ブロイラーの思考論の核心は、要素の集合ではなく、構造全体を統べる「選択機構」にある。

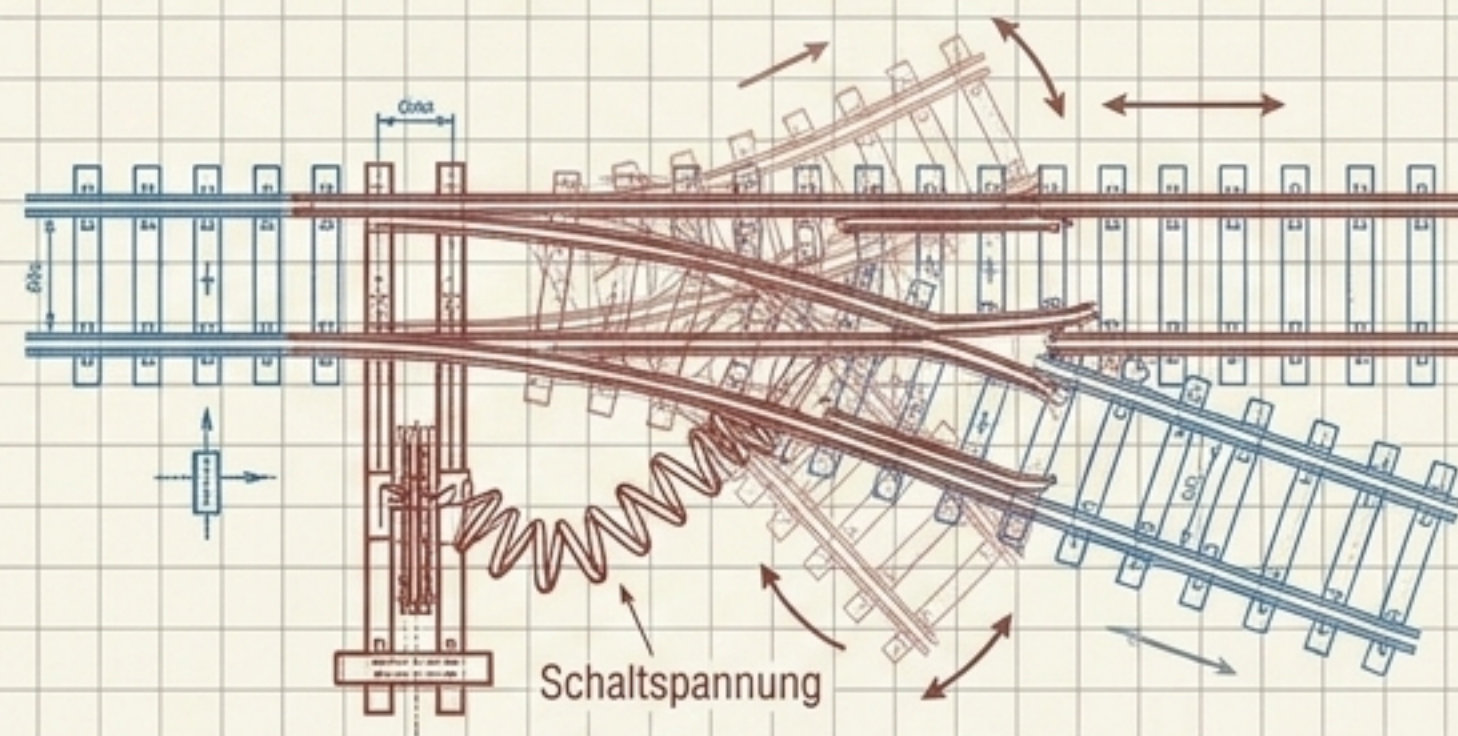


「連合弛緩」の実相：切替緊張の低下

健常 / Healthy



統合失調症 / Schizophrenia

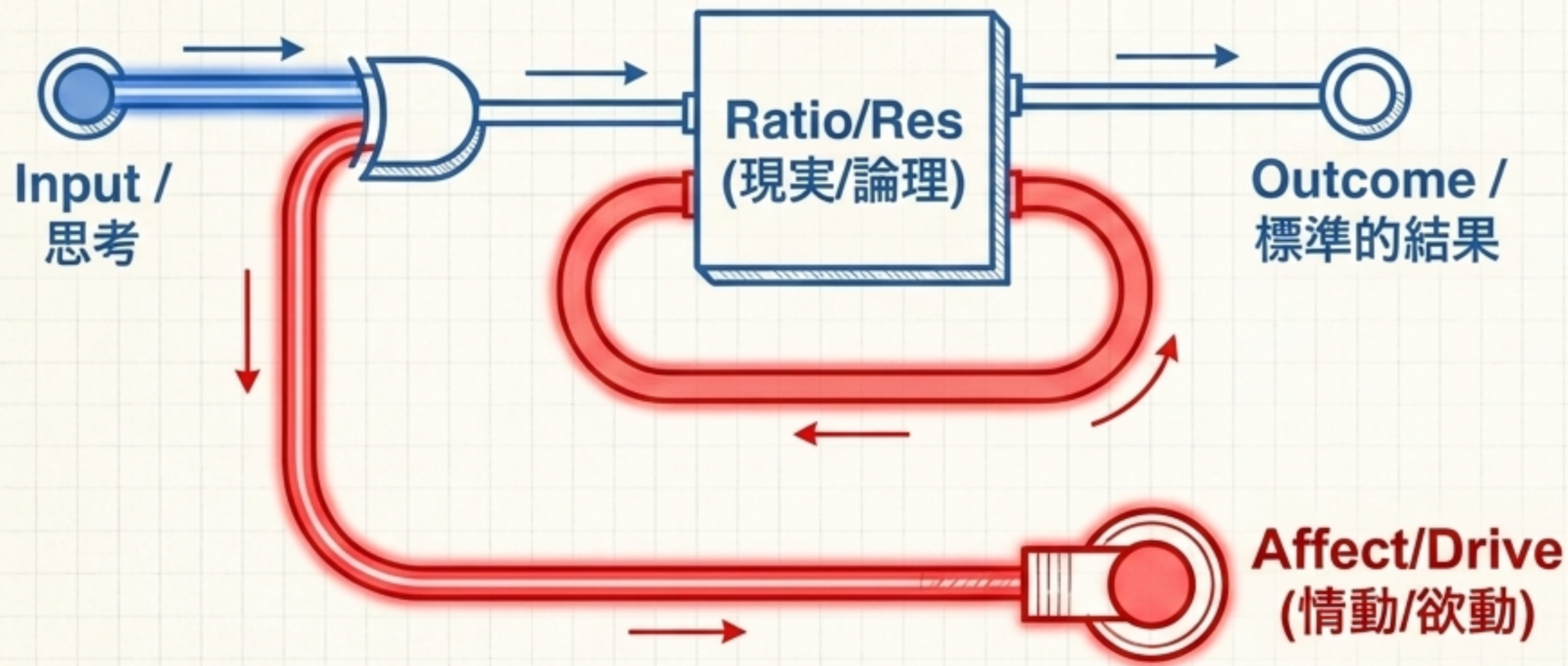


- 1921年の『魂の自然史』思考論に「Lockerung (弛緩)」の語は登場しない。
- 緩むのは連合そのもの（線路）ではない。「切替緊張 (Schaltspannung)」である。
- バネの張力（緊張）が低下することで、切替が他の影響に従い、あちらこちらへぐらつく (schlottern)。

崩れるのは「連合の在庫」ではなく、「在庫の中から選ぶ力」である。

自閉的思考のメカニズム：Dereierendes Denken

Dereieren = de (離脱) + reor / ratio / res (現実・論理)。
「現実から逸れる思考」。

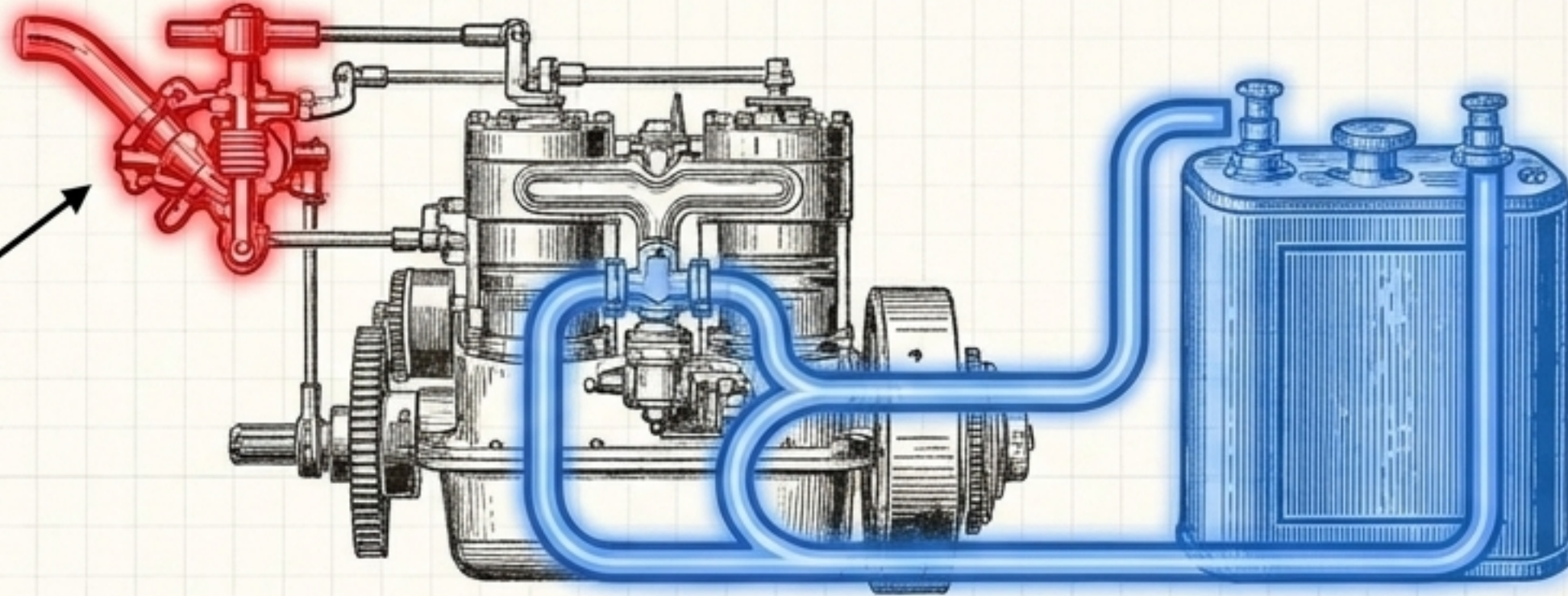


- 遊び、神話、夢、そして統合失調症において、思考は現実との矛盾を顧慮しない。
- 経験や論理の制約をバイパスし、本能と情動によって与えられた「内的欲求」へ直結する。
- 連続性: いかなる思考も微量の弛緩を含む。統合失調症は「正常な心理学的連続量」の極限として定位される。

心の動力学：Ergie と Psychokym

Circuit Red
steering valve

Ergie



Psychokym
(心流)

Ergie (態度の決定)

- 情動性と欲動を束ねる新語。
- 環境に対する「受容」か「拒否」かという態度決定（エネルギーの用途と量の規定）。

Psychokym (心流)

- 心的過程の基体をなす神経エネルギー流 (Neurokym) そのもの。
- 実在するが、その物理化学的本性は「未知」とであると明言される（空白の措定）。

「活動性 (Aktivität)」という既存語を避け、独自の動力学モデルを構築した。

第4部における「目的論の禁止」



**Teleology /
Universal Purpose**

「目的とは、人間のように意識された目標に従って行為する存在との関連においてのみ存在しうる。……宇宙や世界秩序にそれを帰することはできない」(S.326)

Philosophical Stance (1921)

- 徹底した自然科学的決定論。
- 「我々の生に目的はあるか？」という問いは、「正義の含水率はいくらか？」「私の靴は満足しているか？」と同じく無意味（誤って立てられた問い）である。
- 戦略的注記: この「禁令」の存在が、ヤスパーズ批判の謎を解く鍵となる。

判定①：アンリ・エーの評価の検証

Claim 1: 「原子論的・連想主義的」 → × 誤り（部分的な見落とし）

記憶の「記銘」プロセス（第3部A章）は機械論的だが、思考論（第3部C章）は「切替（Schaltung）」による階層的・構造的な統一を主張しており、原子論的ではない。エーは階層構造を読み落とした。



Claim 2: 「精神を脳の組織化に浸透させるダイナミックな一元論」
→ ✓ 正確な看破

「思惟する実体ではなく、思惟する機能が存在する」という機能一元論の核心を完璧に射当てている。心を「別の物」に還元するのではなく、「機能」へ還元とした点を正当に評価した。

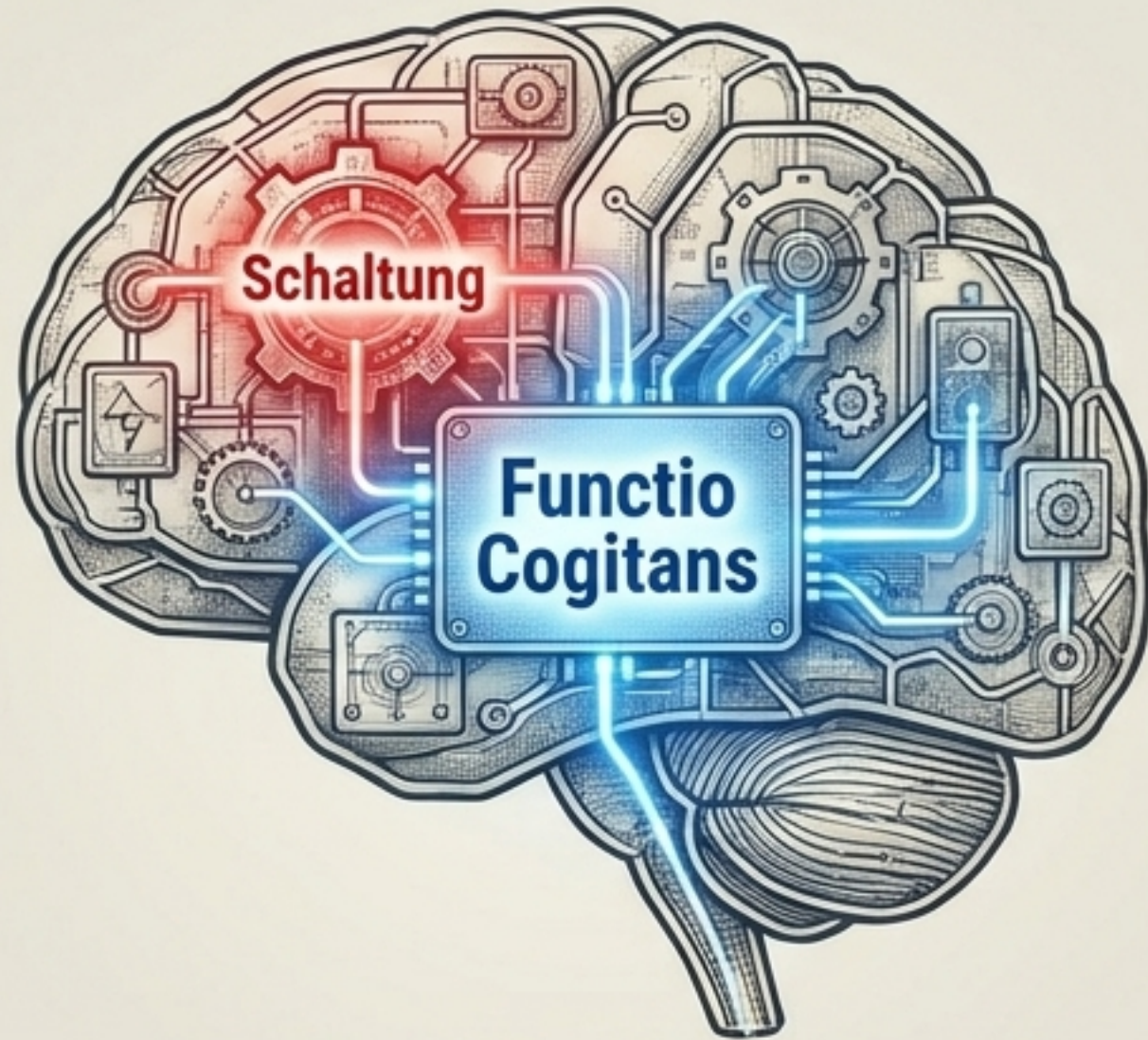


判定②：ヤスパースの3項目録と年代マトリクス

ヤスパースの指摘した三項	『魂の自然史』（1921）	『精神様体』（1925）
1. 記憶（ムネーメ）的諸機能	存在する （細胞レベルの普遍機能）	存在する
2. 統合（Integration）	存在する （機能の統一として中核）	存在する
3. 構造と力の合目的性 （目的論）	明示的に禁止（S.326）	許容・原理への統合

結論: エーとヤスパースは矛盾していない。彼らは「同一思想の異なる段階」を見ていた。1925年に追加されたのは新素材ではなく、1921年に自ら課した「禁令（目的論）」の踏み越えであった。

精神医学史への含意：構築家としてのオイゲン・ブロイラー



1. 連合主義者からの解放: ブロイラーは要素を集めるだけの連想主義者ではない。選択機構 (Schaltung) を通じて精神の統一を構想した「構造の構築家」である。
2. 「連合弛緩」のパラダイムシフト: 崩壊するのは部品（連合）ではなく、選択の張力（緊張）である。
3. 歴史的文脈の修復: 『魂の自然史』（1921）を体系の 中心に据えることで、エーとヤスパーズの断絶が繋がり、臨床から生物学へ至るブロイラーの壮大な知的格闘の全貌が明らかになる。

「真理が相対的な何かであることを知っている。私は述べたことを『真理』だと考えるが、『絶対的真理』だとは考えない。」－ブロイラー (1921)